

I 研究主題

自ら考え、伝え合い、未来に向かって問い続ける子どもの育成

—社会的事象の見方・考え方をもとにして
問題発見から問題解決に向かう授業づくり—

1 主題設定の理由

現代社会の変化はめまぐるしい。今の子どもたちが成人し社会で活躍するところには、さらに進んでいく少子・高齢化社会のなか、生産年齢人口の減少、ICTの進展による雇用環境の変化、地球規模での環境問題やエネルギー問題等、様々な課題に直面することになるであろう。また、2019年から流行した新型コロナウイルス感染症は、人々の生活様式や考え方を大きく変化させた。災害やパンデミック等、いつ起こるかわからない未曾有の事象に対しても、よりよい解決をめざして考え続けなければならないことを目の当たりにした。変動制・不確実性・複雑性・曖昧性が顕著になり、先行きが不透明で将来の予測が困難なVUCAの時代を生きる子どもたちには、先を見通して論理的に考える問題解決能力、多様な価値観を理解し協力するコミュニケーション能力、新たな知識やスキルを習得し続ける学習意欲、などが求められる。

徳島県小学校教育研究会社会部会では、「未来に向けて考え続け、よりよい社会を切り拓く子どもの育成」を研究主題とし、社会に対する認識と判断する力を育む社会科学習を通して、社会の創り手として、よりよい社会を協働して切り拓いていくことができる子どもの育成をめざしてきた。よりよい社会とは、一人一人が社会を創る主体となり、持続可能でウェルビーイングが実現される社会のことをいう。

本校の考えも本県社会部会と軌を一にしつつ、県研究主題にある「考え続け」ることをより焦点化して、「問い続ける」ことを研究の軸とする。問いをもつことが、学びの起点となったり、考えることがより明確になったりする。また、「知りたい」「聞きたい」といった、主体的な態度や他者との関わりのかきかけにもなる。そして、問い続けるためには、社会に関心をもつこと、社会を知ること、自らの考えを他者と伝え合い、より多くの考えに触れるなかで、自己や集団の認識をひろげ深めていくことが求められる。

しかし、「令和4年度 小学校学習指導要領実施状況調査の結果について」では、「社会に見られる課題を捉え、社会への関わり方を考えようとする」と課題があるとされている。本校の子どもも例外ではなく、社会への関心や主体性が高いとはいえない状況にある。学習する問題は与えられるものだと認識し、どこか他人事に感じている子どもも多い。令和5年度に実施した児童用アンケートでは、「自分の意見や考えをもとに、話し合いができています」と「自分が調べたことや考えたことを発表しているときが楽しい」と答える子どもの割合が低い。自分の意見をもつことやそれを表現することに苦手意識をもつ子どもが多いことが明らかになった。さらに「学習後も引き続き問題について考えている」という回答は、特に低い結果となった。

以上のことを踏まえ、自ら問いをもち、よりよい解決に向けて考え、伝え合いながら、自分なりの答えを導き出し、さらに問い続ける子どもの育成をめざして、本校研究主題を設定した。

2 研究主題・副主題について

(1) 研究主題について

① 「自ら考える」について

本研究では、子どもたち一人一人の「考える活動」に重きを置く。

「自ら考える」とは、他者の考えを受け止め、受け入れたり倣ったりする姿勢も大切にしつつ、問題を自分事として、共感したり比べたりして、考えていくことと捉える。

子どもたちが、問題を見だし、その解決をめざして、必要な情報の取材・収集・取捨選択や、考え（アイデア・価値等）の形成・吟味・表現を行うにあたり、常に「私は…。」「私なら…。」と主体的に考えるように働きかけ、習慣化することをめざす。

② 「伝え合う」について

「伝え合う」とは、一方的な発言でなく、他者の意見を共感的あるいは批判的に受け止め、自分の考えと比較したり、他者の意見と折り合いをつけたりするなかで、自らだけでなく学習集団の考えをも深めることをめざした活動と捉える。具体的な姿として、「以前はこう考えていたが、〇〇さんの意見から…。」「〇〇さんの意見のここは分かるけれど、自分は…。」「みんなの意見から、見えてきたことは…。」のように、比較・分類・関連・総合などの考え方を働かせながら思考が深まっていくような姿をめざした活動である。

なお、「伝え合う」には、音声言語だけでなく、文字言語や資料など多様な手段を用いる。

③ 「未来に向かって問い続ける」について

1時間の学習、1単元の学習、1学年の学習、さらに小学校社会科の学習を終えた後も、学習したこととの意識がつながり、これまでの学習で他者と考え合ったことをもとに、「自分たちにできることはなんだろう。」「これで本当によいのだろうか。」「よりよくするにはどのようにすればよいのだろうか。」などと、自分自身で問いかけ、社会との関わり方や社会の在り方を問い続ける資質・能力の育成をめざす。

「問い続ける」姿は、様々な場面で見られることが想定される。例えば、単元の学習中に問いが生まれ、その問いを意識しながら学習を進めていく姿や、単元や学年をこえて「以前はこう考えていたが、本当にそうなのだろうか。」「学習した〇〇は、これからどうなっていくのだろうか。」などと、繰り返し問いをもち、考え続ける姿が考えられる。また、学習の場面に限らず、生活の中で社会に見られる課題を問題として察知し、社会的事象の見方・考え方を働かせながら、よりよい解決に向けて考えようとする姿もまた、問い続ける姿のひとつとして捉えている。

(2) 副主題について

本研究における問題発見とは、子ども自らが問題に気付く、あるいは問題と捉える、問題を自分のものにするなど、広く捉えたものであると措定する。

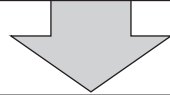
子どもは、様々な問いをもつことが考えられるが、社会科らしい学びとなるように、社会的事象の見方・考え方を働かせることを意識したい。社会的事象の見方・考え方を働かせながら、子どもが自分のものとした問題は、「調べたい」「分きたい」「伝え合いたい」という思いを抱かせる。そして、見通しをもって調べ確かめ、友達と考え話し合う活動を通して解決を図る。さらに、問題解決をするなかで、新たな問題に気付いたり、以前解決したと思っていた問題を見つめ直したりするための支援を充実させることによ

り、問い続ける子どもの育成をねらいとした授業づくりをめざしたい。

(3) めざす子どもの姿について

【めざす子どもの姿】

- 根拠や理由をもとに自分の考えをもったり決めたりしている子ども
- 他者と伝え合いながら、いろいろな視点・立場から考えを深めていく子ども
- 進んで社会に関わろうとする子ども
- 問題を自分から見つけ、解決しようとする子ども



未来に向かって問い続ける子ども

3 研究仮説

① 単元構想と振り返り

1時間の終末に次時へつながる問いが生まれるように単元を構想する。そして、振り返りの中で子ども自身が自覚した問いを生かして次時を展開することにより、満足感や達成感を体験し、子ども自らが意欲的に問題を発見したり解決しようとしたりすることにつながり、問い続ける子どもが育つことにつながるのではないかと。

② 認識と判断

自分の考えを「決める」「選ぶ」判断場面を意図的・計画的に設定することにより、社会的事象の見方・考え方を働かせながら、根拠や理由をもとに自分の考えをもったり決めたりするなかで、自己や他者との対話が生まれるのではないかと。その過程を通して、自分の考えを表現する力、社会に対する認識と判断する力が育つのではないかと。

③ 考えを深める手だて

発問、資料提示、板書、視点や立場の明確化等の手立てを意図的・計画的に講じることにより、子どもたちは自ら考えを深め、他者と深め合う力や、多角的・汎用的に考える力が育つのではないかと。

4 研究の構想

徳島県社会部会主題「未来に向けて考え続け、よりよい社会を切り拓く子どもの育成」

—社会に対する認識と判断する力を育む社会科学習—

沖洲小学校主題「自ら考え、伝え合い、未来に向かって問い続ける子どもの育成」

—社会的事象の見方・考え方をもとにして問題発見から問題解決に向かう授業づくり—

めざす子どもの姿

- 根拠や理由をもとに自分の考えをもったり決めたりしている子ども
- 他者と伝え合いながら、いろいろな視点・立場から考えを深めていく子ども
- 進んで社会に関わろうとする子ども
- 問題を自分から見つけ、解決しようとする子ども

